

仏教文学会二〇二二年度四月例会のお知らせ

陽春の候 会員の皆様におかれましては益々ご清栄のことと存じます。

左記のように四月例会をオンライン上で開催いたします。参加方法については別紙をご参照ください。大勢の方のご参加をお願い申し上げます。

◇期日 二〇二二年四月二三日(土) 一四時～一七時三〇分

◇開催協力校 成蹊大学

◇共催 科研費・基盤研究C「近代寺院資料の基礎的研究」(研究代表者…藤巻和宏)

《シンポジウム》戦時下の仏教―近代仏教研究からの視角―

開会の辞

成蹊大学 平野多恵 氏

シンポジウム

趣旨説明

コーディネーター 近畿大学 藤巻和宏 氏

戦時下の中世禅林文芸論―芳賀幸四郎を例として― 花園大学国際禅学研究所 飯島孝良 氏

宗祖と戦争―悶える親鸞と戦う日蓮― 日本学術振興会特別研究員 大澤絢子 氏

戦時下の真言宗―報国運動と「勤王僧」― 大正大学総合仏教研究所 高橋秀慧 氏

コメント 東北大学 オリオン・クラウタウ 氏

金城学院大学 船田淳一 氏

討議

閉会の辞

実践女子大学 大橋直義 氏

*懇親会は開催しません。

*委員会のお知らせ

当日は委員会をオンラインにて開催いたします。詳細は別途メールでお知らせいたします。

時間 一二時三〇分～一三時三〇分

*問い合わせ先

・事務局 実践女子大学文学部 大橋直義研究室

電話：03-6450-6848 (ダイヤルイン 可能な限りメールで) 連絡ください)

E-mail: ohashi-naoyoshi@jissen.ac.jp

《シンポジウム》戦時下の仏教―近代仏教研究からの視角― 研究報告要旨

仏教史研究の世界では「近代仏教」に注目が集まっており、特にここ二十年ほどで急速に進展し、様々な成果が蓄積されている。仏教文学会としても、こうした隣接分野の成果に学び、新たな領域を切り開いていきたい。ただし、近代仏教研究の盛行も、「宗派」という観点に立つならば、真宗や日蓮宗（日蓮主義）の研究が進んでいる一方で、その他の宗派は立ち後れの観があり、一様に進展しているとは言いがたい。もともと、「宗派」という認識自体、研究者によって捉え方が異なるので、その点は留保が必要であるが。

さて、そのような状況を踏まえつつ、近代仏教を論ずる切り口のなかでも特に注目されてきた「戦争」との関わりをテーマに据えてみたい。時あたかも、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻が世界を驚かせ、実感のともなわない過去として色あせた我が国の戦争の記憶も、改めて喚起される状況にある。本シンポジウムでは、アジア・太平洋戦争を中心とする近代日本の対外戦争という枠組みを提示し、そのなかで仏教がいかなる役割を果たしたのか、仏教者はいかなるスタンスで戦争に臨んだのか、という問題について考察していく。戦争という特殊な歴史的状況における仏教の実態を見るにとどまらず、我々研究者が、国家や社会、そして世界にどう対峙していくべきかという現代的な問題を考えるにあたっても、有益な視点を提供できるであろう。

*

*

*

戦時下の中世禅林文芸論―芳賀幸四郎を例として―

花園大学国際禅学研究所 飯島孝良

この度の発表では、戦時下における「禅」とその文学に関する学術的位置について考察する。ただ、この「禅」は必ずしもある特定の禅宗を指すとは限らない。「禅」というイメージそのものが不定形であることを本質とすることもあり、それに関する「語り」も多く提示されることとなった。具体的に言えば、一休宗純（一三九四―一四八一）はその著作において矛盾的な性格が表現されていることもあり、没後の中世から近現代に至るまで数々の文献や芸術作品を通して「像」がいくつも提示されてきた。そうした「語り」の多層性にこそ、いわゆる「禅文化」の言説の厄介であり面白い面がある。そうしたことを、近著の『語られ続ける一休像―戦後思想史からみる禅文化の諸相』（ペリカン社）で論じている。

そうした「禅」が、とくに形骸化した価値観を越えて新たな文化を提示せしめるものとして多くイメージされるようになったのは、じつは敗戦を経て戦後のことであった（とくに一休を破戒の風狂僧として語るのは明確に一九四五年以降のことである）。これに関連して特に注目されるのが、中世史学者の芳賀幸四郎（一九〇八―一九九六）である。『東山文化の研究』（一九四五年）などにみえる芳賀の姿勢は、まさに戦時下の忸怩たる思いがにじみ出るものといえる。というのも、足利氏という「逆賊」の時代に咲いた所謂「東山文化」を論じることそのものが、皇国史

観の強い戦時下では望まれることではなかったからである。戦前までは毀誉褒貶甚だしかった「東山文化」をどう評価するか、このこと自体に皇国史観との繊細な距離感がうかがわれるのである。

この度のシンポジウムでは、芳賀をはじめとした中世文化史家が禅林文芸を内包する「東山文化」を戦前までにどう位置付けていたか、そのような禅林文学の特徴が戦前と戦後でどう位置付け直されたか、その際、同時代に展開した中世史学が皇国史観とどのように対面していたか、或いは戦後に重視された「民衆」像と一休の〈像〉とがどのような接点を生み出したか、こうした諸問題について改めて光を当てることで戦時下における中世禅林文芸論の在り方を明らかにしたい。

宗祖と戦争―悶える親鸞と戦う日蓮―

日本学術振興会特別研究員 大澤絢子

日本の宗祖のうち、近代以降の文学作品に取り上げられることが最も多いのが、浄土真宗の宗祖親鸞と日蓮宗の宗祖（祖師）日蓮である。彼らは伝記の数や量も多く、真宗と日蓮宗は宗祖に対する「語り」が大量に蓄積され、強固な宗祖信仰が教団の基盤となっている。

本報告は、教団・教義・宗祖像の三点から戦時下における真宗と日蓮宗の動向を概観した上で、仏教文学を含む教団内外で語り出された親鸞と日蓮像の相違および戦時下に彼らのイメージが再構築されていった実態を明らかにする。

国家総動員法や宗教団体法など、政府からの働きかけを受けた各仏教教団は、従軍や資金援助、教化活動などを通して積極的に翼賛体制へ協力していった。教団内の影響力ある人物によって宗祖の思想の読み替えもなされ、真宗の場合は仏法と俗法間の矛盾を克服する論理として真俗二諦が利用され、勅語を阿弥陀仏の誓願と宣伝、日蓮宗では日蓮の教義が国家至上主義として理解されていった。

両教団における聖典や日蓮遺文の削除改訂からは、読まれる古典／読めなくなる古典の問題や、宗祖・教団・信仰の三者関係の複雑さが見えてくる。また、戦時体制化で自ら態度を規律していた教団は宗祖のどの「顔」を前に出し、何をささないかを選別していくが、これは伝記（とそれに基づく宗祖像）の取捨選択の歴史でもある。さらには教団外にあって、自らの信仰や思想、時代動向を親鸞や日蓮に重ね合わせていく作家たちもいた。これらは、近代仏教研究と仏教文学研究の双方に通じるテーマでもある。

受動的・能動的に戦争へ加担した真宗と日蓮宗、そしてその周辺で見られたのは、明治・大正期に注視された悶える親鸞像の後退と、従来の伝記で語られてきた国家守護者として戦う日蓮像の強化である。二人の宗祖の思想や体験、ことばは戦時下で改変され、以前とは異なる彼らの「顔」が打ち出されていく。そこに顕現した親鸞と日蓮もまた、戦時下に教団をまとめ上げ、それぞれが思いを託すために欠くことのできない宗祖だった。

近代における真言宗の研究は、未開拓といって過言ではない分野である。そのため、事実関係の紹介や研究蓄積のある他宗との比較を行うこと自体に意義が見いだせると考えられる。そこで本報告では、戦時下の真言宗について概観した後、当時盛んに喧伝された「勤王僧」の言説を踏まえ、戦時下における真言宗と僧侶の有様を活写してみたい。

一九三七年の日中戦争勃発を機に、第一次近衛内閣は「国民精神総動員実施要綱」を閣議決定し、総力戦体制を推進していく。一九三八年五月には国家総動員法の施行、十一月には東亜新秩序建設声明がなされ、宗教団体も報国という名の「公益」に資することが求められていく。こうした傾向は一九四〇年の「宗教団体法」施行により一層顕著となる。同年の大政翼賛会結成以降、あらゆる団体が再編させられる中で、仏教教団も合併が促進され、真言宗でも古義・新義の八派に合同の動きが見られる。こうして一九四一年に成立したのが「真言宗」である。大真言宗・オール真言宗などと言われるこの教団は、諸宗横並びで実施された「仏教報国運動」を類に漏れず展開していく。

法制度以外にも目を向けてみる。一九三〇年代以降、「日本精神」論の流行から、仏教は公然と批判対象になっていた。そのため、各教団は歴史と伝統を動員して天皇との結びつきを強調するとともに、主体的な国策協力によって公益性を社会に発信する必要があった。通宗派的に聖徳太子讃仰運動が推進される中、真言宗では弘法大師による「鎮護国家」の伝統を掲げた。また、報国運動を担った真言僧たちは、明治維新に活躍した「勤王僧」に自らの姿を重ね合わせた。「勤王僧」の言説は、当時影響力のあった仏教系知識人である友松圓諦を中心に主張されたものであるが、聖徳太子や祖師の存在が教団全体の公益性を主張する根拠であったとするならば、「勤王僧」の言説は、僧侶自身のアイデンティティに響く言説として機能したと考えられる。